

## 「刷り込まれたよき時代」

昭和二十五年卒業 佐藤 哲男（千葉大学名誉教授、薬学博士）

七十歳を過ぎた頃から高校時代が無性に懐かしくなった。それは昔の友が一人、二人と逝ってしまったからかもしれない。昭和十九年に、出来て間もない旧制秋田市立中学に入学した。それは私の毎日の生活リズムを大きく変えるきっかけになった。内弁慶で友達との遊び方を知らなかった私にとって、初めて会う同級生はみんな世慣れた大人に見えた。入学して四年のときに、新制秋田市立高校二年に編入した。つまり、中学入学から数えて六年間、高清水の校舎で学んだことになる。その頃、校舎の周辺には全く建物がなく、生徒達が「砂漠」と呼んだ砂地は砂丘の様に続き、砂地を挟んだところに「繭検定所」があった。朝早く市内の大工町の停留所から二輛立ての路面電車（市電）で通った。定期券を買って電車に乗る事は勿論初めての経験である。電車が動き出して間もなく視界が開けて、田んぼの中に立っている石油やぐらが「ギーコーギーコー」と音を上げながら石油を採掘している横を電車は走った。今では想像できない事だが、その当時の新国道の周囲は一面田んぼで建物は一軒もなかった。將軍野の駅で電車を降りて、列を連ねて学校に通った。冬など、雪で電車が動かないときは、友人達と連れだって、田んぼから吹きつける吹雪の新国道を歩いた。忘れられない思い出である。

私どもが市立中学校に入学した頃は戦争の末期で、学校では毎日軍隊から派遣された軍人による訓練が続いた。農家の田植えの手伝いにも動員された。戦争中はどこの家も夜になると電灯の光が外へ漏れない様に、電燈の傘を布切れで覆い、その下で家族は寄り添う様に生きていた。土崎の日本石油の製油所がアメリカの空軍により爆撃された翌日、昭和二十年八月十五日に戦争は終わった。それまで夜になると薄暗かった家の中は、まぶしい程の電光に照らされた。やがて、東京から疎開された先生や海外から引き揚げられた先生がわが高校にも赴任した。その先生方の授業は無性に新鮮だった。というより珍しかった。それまでに経験しなかった東京弁での授業は、東京の空気を校内に持ち込んだ。今考えてみると、生徒なりにそれまで地方区だった学内の雰囲気が、ユニークな先生が増えるにつれて全国区になった感じだった。

校長先生も東京からやってきた。秋田市立中学が開校した昭和十七年に、初代校長として大高常彦先生が東京から着任された。謹厳な大高先生はその後東京に戻り大学の先生になったと聞く。また、昭和二十年には久司慶三先生が二代目校長となり、その後秋田大学教授になられたそうである。

多くの新任の先生の中で、際立ったのは石田先生である。東京での空襲で家財道具から衣類ま

でを失ったという先生は、毎日一張羅の黒の礼服を着て授業に出た。教室に入るや否や、東京での空襲のときの恐さや、食糧事情の悪い東京について一時間ほど休む事なく話をして、終業ベルが鳴ると、「それではこれで終わります」と言って教室を出て行った。生徒は東京の話と先生の話術に圧倒された。

海軍の制服を着た西村進先生は軍隊式でやたら厳しかった。その西村先生と、平成二十一年四月に母校での私の講演会のときに卒業以来数十年ぶりで再会した。校舎が火事で焼失したときの苦労話をする先生は当時と変わりなくお元気だった。また、東京物理学校（現東京理科大学）を卒業したばかりの井上 肇先生の博学ぶりにも驚いた。多分数学の担当だったと思うが、問題集に載っている難解な問題をこともなげに即座に解いたのは敬服の極みであった。井上先生が魔術を解く様に次から次へと難問を我々の目の前で瞬時に解くのを見ているうちに、私はそれまで全く歯がたたなかった数学が大好きになった。まさに熱血教師だった井上先生の影響が大きい。その井上先生は、平成二十二年六月に九十歳でお亡くなりになられた。ご冥福を心からお祈りしたい。

私にとって、家から一時間近くかけて学校へ行く毎日が楽しかった。それは級友との交わりが一日毎に深まったのと、個性豊かな先生方の授業を聞くことができたからである。午後になると運動部の活動が始まり、暗くなるまで野球、陸上、軟式テニス、ラグビーなどに分かれて夢中になった。私が級友と一緒に新しく立ち上げた軟式庭球部（ソフトテニス部）は、全県の決勝戦まで勝ち残ったことはちょっとした誇りだった。文化部では、嶋田親一君が演劇部を新しく立ち上げ、山本賢太郎君が中心になって活動した弁論部も生徒の関心を引いた。嶋田君は後にプロの演出家になり、全国に知られた名プロデューサーになった。山本君は東京都議会議員となって花を咲かせた。その他、多くの級友は県内、県外の多くの分野でそれぞれ目覚ましい活躍をした。

ここで突然話が変わる。最近、医学、薬学で最も熱い話題は「万能細胞」である。心臓、腎臓、脳などすべての臓器は、もとは一個の細胞から始まる。これが「万能細胞」である。その細胞にいろいろ異なった刺激を与えると、やがては肝臓になり、心臓、腎臓が出来上がる。つまり、万能細胞はいろいろな可能性を秘めている。高校教育でいうならば、さしずめ刺激は先生で、細胞は生徒だ。刺激がうまく伝わると、生徒は期待した通り育つ。刺激が小さいと中々生徒には伝わらない。逆に強過ぎると細胞は壊れかけて満足な機能を果たさなくなる。高校教師のご苦労は並大抵ではない。

数年前に、國では「ゆとり教育」を実施した。生徒の長所を活かすために、学校での授業時間を少なくして自由に学ばせるのが狙いだった。しかし、予想は見事にはずれた。全国で学力の低下が著しくなり、教師はその対応に頭をかかえた。最近、國はようやくその過ちを見直したが、一度タガを緩めたものはあわてて締めてももとへ戻るには時間がかかる。ただ幸いな事に

秋田県は例外だった様だ。教育レベルの評価で全国一となった。それも三年も続くとまぐれではなさそうである。教育の専門家によると、昔の寺子屋では三十人程度の子供が対象だった。これくらい的人数が教育効率が最も高いそうだ。少子化も悪い事だけではないらしい。

ここで在校生の皆さんに一言。高校時代にテニスに夢中だった私は、満足な受験勉強をしないまま大学を受験した。試験場で問題をみた途端全く歯が立たなかった。自分で言うのも変だが、一年間の浪人生活のときは、睡眠時間を惜しむ程受験勉強をした。恐らく私の生涯で一番勉強に集中した一年である。幸いに翌年は希望の大学に合格した。しかも、数学の問題はかなりの自信で解けた。これは高校時代の井上 肇先生の影響によるものである。後年、私は最初の年に受験に失敗した大学の教師になり、当時歯が立たなかった受験問題を作成する立場になった。世の中の偶然とは恐ろしいものである。高校の詰め込み授業には一長一短があるが、私は賛成派だ。ただし、それが何年も続くと精神をむしばむ事があるので、せめて一年間だけでいいから夢中になって勉強する「訓練」をしてほしい。その経験は間違いなく脳の中に刷り込まれて、卒業後に就職や進学したときには何倍ものストレスにも耐えられるだけの力を生み出す。

世の中の人「東大生は全員が秀才だ」と錯覚している。勿論何割かの学生はそうかもしれないが、私が知っている限り、彼らは高校時代に他から見えないところで大変な努力をしている。その苦しみが、彼らにとってどんな事でもやり抜けるという自信と、いざというときの瞬発力と順応性につながっている。若い高校生の場合、いくら詰め込んででもせいぜい脳の収容力の一二割しか使っていない。何十年もそれが続くと耐えられないかもしれないが、是非一年間だけでも知識を詰め込む経験をしてほしい。

本題に戻る。私は仕事の関係で一九九五年から最近まで毎年海外へ頻繁に出かける機会があった。これまで三十ヶ國を訪れたが、外国の街で「ジャパン」とか「ジャパニーズ」という単語が聞こえると、本能的にそちらを見る。私の身体に刷り込まれた日本人の遺伝子がそうさせるのだ。それと同じ様に、故郷を離れて四十年以上経っても、テレビの画面や新聞で「秋田」という言葉を見るとつい目が吸い付けられる。故郷は私の身体に刷り込まれて生涯消えることはない。

かつて砂漠の中に誕生した中学は高校となり、あと十年で一世紀を迎える。多くの友はそれぞれの道に進み、何十年か経って例外なく訪れる人生の終焉に向かっている。眠れない夜には、中学、高校時代の旧友のことを懐かしく想いだす。多感な時代に同じ校舎で学んだ友は生涯忘れる事が出来ない。最近、その友が一人、二人とこの世を去るのを聞くとたまらなく寂しさを感じる。